

連用修飾節を構成する接続助詞類の使用実態

—作文データベースを用いて—

木山 三佳

要 旨

日本語学習者がどのように接続助詞類の意味を体系づけていくかを探るために、国立国語研究所の作文データベースから連用修飾節を構成する接続助詞類を収集し、習得順序を予測し、中間言語における接続助詞類の意味の変異を分析した。

作文で使用された接続助詞類の使用異なり語数を発達段階と考えると、調査データから習得順序は「て」「から」(使用異なり語 1~2 語)、「連用中止」「ので」「し」「と」「ば」「が」(使用異なり語 3 語)、「のに」「たら」(使用異なり語 4 語)、「ても」「けれど」「なら」(使用異なり語 5 語)、「たり」(使用異なり語 6 語)と推測された。また、中間言語における接続助詞類の意味領域が、規範的なものと異なる変異は、学習者が形式と意味の対応の試行錯誤をしていることをあらわし、「て」「と」を中心に多くみられた。さらに、「が」の前置きとしての談話的機能は、文法的な機能よりも後で発達するものと予測された。

【キーワード】 中間言語、 接続助詞、 変異、 習得順序

1. はじめに

接続助詞と用言の連用形(以下、接続助詞類と称する)は、主に初級の後半から複文構造の導入とともに、何種類もの形式が日本語学習者(以下、学習者とする)に示される。授業を通して、各形式の意味機能や、用法の似ている形式の異同を整理して理解したつもりでも、その理解が正しいかどうかを何度も試してみなければ、完全に使い分けることはできないようである。多様な表現を使えるようになる学習者もいる一方で、表現意図に関わらず、少数の言語形式だけの使用にとどまる学習者もいる。学習者がどのように意味が似ている接続助詞類を整理していくのか、接続助詞類の中の習得順序はどうなっているのか、などを調査することで、学習者が接続助詞類の形式と意味の対応関係を組織する過程が明らかになり、学習者の習得段階の把握や習得上の困難点とその克服法への示唆など教育への還元が期待できるものと考え。

本稿では、同じ題名で書かれた意見文の作文データベースを用いて、連用修飾節を構成する接続助詞類の使用調査をおこない、実態により近い中間言語における接続助詞類の意味の発達過程を探る。

2. 先行研究

接続助詞類の研究には、意味を明らかにすることを目的とするものと、使用実態を調査するものがある。国語学では、意味や構文からみた接続助詞の分類（国立国語研究所 1951、渡辺 1971、等）が行われてきた。使用実態調査としては、日本語母語話者（以下、母語話者とする）を対象とした談話データを分析した国立国語研究所（1955）や新聞の社説を調査対象とした西（1997）などがある。前者では、母語話者が使用した接続助詞類の内訳は、「て」32.8%、「けれど」13.6%、「から」11.6%、「と」9.7%、「ば」6.2%の順に多く、後者では、「連用中止法」38.3%、「て」16.3%、「が」（逆接）9.7%、「ば」8.0%、「ても」4.0%、「が」（前置き）4.0%の順としている。データの質や調査方法の違いなどがあるので比較できないが、話し言葉と書きことばでは使用される接続助詞類の傾向が異なり、特に「から」「連用中止」では顕著な違いがみられることがわかる。

日本語教育の分野では、学習者の誤りが多く見られる接続助詞類の意味を明らかにする研究がおこなわれ（池尾 1963、富田 1993、他）、中でも近接した意味をもつ別の形式との比較によって明らかにする手法をとるものが多い（永野 1951、望月 1990、張 1998、他）。また、学習者に共通するいわゆる意味の誤用から、近接した意味をもつ接続助詞類の意味と指導上の留意点を導く誤用分析（市川 1993、吉田 1994 等）が行われている。

習得研究では、ある言語形式の意味の習得に他の言語形式が関与し、規範的意味領域とことなる意味領域をもつ学習者言語について、「変異（variability）」⁽¹⁾という語で説明している。習得過程における変異のパターンの変化を分析した Ellis（1987）では、変異とは、新しく学習した言語形式 form 2 がすでに学習して定着していない言語形式 form 1 と混在していることを表す。特に、form 1 と form 2 の意味がランダムに対応されているシステム化されない変異を「自由変異」と呼び、習得が進むと「自由変異」から、発話のコンテクストに応じて意味が限定されるような「システム化された変異」へと変わる、としている。

日本語の接続助詞類の習得過程で見られる誤用や回避は、複数の形式と意味が対応させられていくために発生する変異であると考えられる。このような変異をふくめて、同時に多くの接続助詞類を対象とすることが必要である。

横断的データを用いた研究では、1~2 種類の接続助詞類を扱うものがほとんどであ

るが、縦断的研究では、接続助詞類の習得順序を探る目的で複数の言語形式が同時に分析されてきた。加藤(1984)では、2名の学習者の20ヵ月にわたる発話データから、学習がすすむにつれ、接続助詞の使用頻度があがるとしている。廣利(1994)は4名の学習者の14ヶ月にわたる日記と談話データから順接節「から・ので」と逆接節「が・けど」の使用が早いとしている。両者とも自由発話や日記がデータで、接続助詞類の選択要因として表現内容の影響も考えられるため、産出が見られた順序をそのまま習得順序とはできない。

表現内容を統制するために、同じ絵をみせて接続表現を誘出する実験的研究としては栃木(1989)がある。学習者11名と母語話者9名を対象に、続き絵を説明するという課題を行った結果、母語話者は継起的、学習者は因果的な接続表現を使う傾向があった。栃木はその違いは回避によると推定したが、使用された接続表現には単語から文まであったことを考えると、言語形式の使用回避を原因とするのは難しい。接続助詞類の習得を分析するには、表現内容のある程度統制した産出データから、複数の接続助詞類を収集し、それらが表す意味を横断的に比較する使用実態調査が必要である。

3. 研究目的と研究課題

接続助詞類のある一つの形式の習得は、接続助詞類全体の意味体系が発達する過程の一部であると考える。中間言語におけるこの動的なシステムを捉えるために、表現内容にある程度の統制がある産出データから、使用された接続助詞類を収集し、以下の研究課題を設ける。

まず、学習者と母語話者の接続助詞類の使用実態を数量的に比較し、日本語の規範と中間言語における接続助詞類の使用比率を先行研究の結果と比較する。次に、使用された接続助詞類の種類の数によって接続助詞類の習得順序を推測し、さらに変異を調べて接続助詞類の意味が体系化される過程を考察する。

4. 調査データおよび方法

4.1 データ

表現意図による違いを統制するために、国立国語研究所の「日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース ver.2」中の「喫煙の規制について」というテーマの意見文を用いる。今回は、収録されているうち、研究に使用することに同

意している学習者（マレーシア語母語話者）32名分を収録順に選んだ。また、比較のために、同様に母語話者33名分のデータも選んだ。

4.2 対象とする形式

本稿では分析の対象を、接続助詞と用言の連用形とする。中でも、連用修飾節（複文を構成する従属節で連体修飾節はのぞく）を構成する接続助詞類に限定する。具体的には、「て」、「連用中止」形、「から」、「ので」、「と」、「ば」、「たら」、「なら」、「けれど」、「が」、「のに」、「ても」、「し」、「たり」である。また、使用数が相対的に少ない「ながら」、「つつ」、「ものの」「くせに」等は「その他」としてまとめて扱う。

4.3 方法

4.3.1 使用実態の数量的比較

最初に、使用された接続助詞類を取り出し⁽²⁾、その規範的意味を国立国語研究所（1951）にそって分類する。「から」「ので」は「理由」、「と」「ば」「たら」「なら」は「条件」、「が」「けれど」「のに」「ても」は「逆接」、「し」「たり」は「並列」とする。「て」で結ばれた複文の前件と後件の意味関係は多様だが⁽³⁾、本稿では、「て」の意味領域を、細分化せず「連用」として一つにあつかう。学習者の産出した接続助詞類を言語形式ごとに分類し、それを意味ごとに大分類しそれぞれ数量で表す。分類には日本語母語話者2名であたった。さらに、データベース上に母語話者の添削がある場合は、言語形式と意味の対応が日本語の規範と異なるかどうかの判断が添削とも一致したものを採用し、分類は言語形式をもとにする。

分類結果から、意見文における学習者と母語話者の各接続助詞類の言語形式ごとの使用数、使用された接続助詞類の異なり語数、意味機能ごとの使用比率、を比較する。

4.3.2 習得順序の推測

先行研究(加藤 1984, 廣利 1994)から、学習が進むにつれて接続助詞の使用頻度があり、その種類も増えていくことがわかっているため、使用異なり語数を指標として習得段階を捉える。使用異なり語数が同じである学習者は、接続助詞類の発達が同様な段階にあると考え、使用異なり語数で発達段階を表す。その段階で使用された接続助詞類すべてが、同じ習得段階にあるものと考え、習得順序を推測する。ただし、形式を誘出するタスクではないので、不使用が未習得を意味しない。母語話者の使用異なり語数の最低数を下回るものを、中間言語的な特徴があるものと考え分析を進める。

4.3.3 変異から見られる意味の変化

さらに、分類時に見出した変異を分析する。例えば図1のように、規範的な意味領域がある中で、学習者の「て」が、①のように、規範的な「連用」の意味で使用されているもの、②のように「理由」の意味で使用されているもの、③のように「条件」の意味で使用されているものがあつたとする。この場合、本稿では②、③のような例を変異と考え、これらも習得過程における進捗と考え、分析の対象とする。図1のような場合は、中間言語における「連用」の意味領域は②、③を含めた点線の領域に拡大していると考えられる。最後に習得順序と変異から、言語形式と意味の対応関係が構築される過程を考察する。

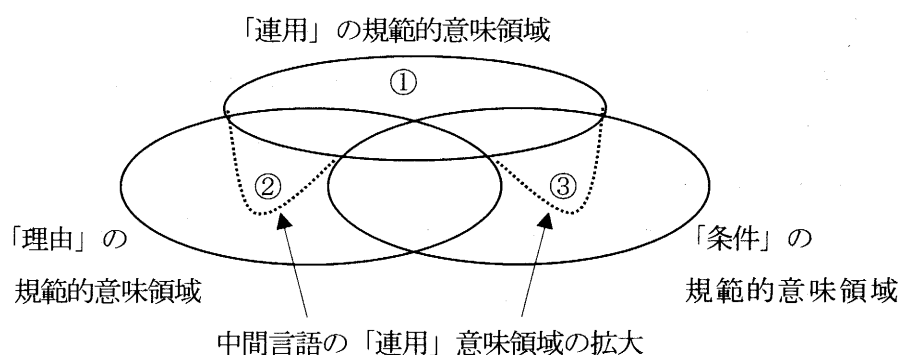


図1 変異からみる中間言語の意味の領域

5. 結果

5.1 学習者と母語話者の接続助詞類の使用実態の数量的比較

接続助詞類の使用数を集計したものを表1に示した。

表1 接続助詞類使用数・割合

	連用形		理由		条件				逆接				並列		その他	合計	使用 平均 異り 数
	て	連用 中止	から	ので	と	ば	たら	なら	が	のに	ても	けれど	し	たり			
学 習 者	116 (43%)		39 (15%)		63 (23%)				35 (13%)				10 (4%)		6 (2%)	269 (100%)	4.2
	98	18	35	4	27	19	14	3	16	4	6	9	8	2			
母 語 話 者	195 (38%)		31 (6%)		111 (22%)				98 (19%)				57 (11%)		23 (4%)	515 (100%)	7.4
	119	76	17	14	35	40	18	18	52	10	32	4	34	23			

母語話者の作文での調査対象接続助詞類 14 種の使用数の多い順に「て」「連用中止」「が」「ば」「と」で、新聞の社説を調査した西(1997)の結果と「連用中止」と「て」の順番が入れ替わっているが後は同じである。一方、学習者は使用数の多い順に「て」「から」「と」「ば」「連用中止」である。

「て」の使用が最も多いのは、その意味領域の広さによると思われる。「連用形」における「連用中止」の使用比率は、学習者 15.5%，母語話者 40.0%と大きく違う。西(1997)は、新聞の社説のようなフォーマルな書き言葉では、「て」接続より「連用中止」による接続の方が多い、としている。母語話者はフォーマルな文体を意識して「連用中止」を使用してもものと思われるが、学習者ではあまり文体が意識されていないものと考えられる。母語話者に比べ学習者は接続助詞類全体の使用にしめる「理由」の比率が高い。また、相対的に学習者は「並列」が少ない。

5.2 習得順序についての仮説

母語話者 33 名の接続助詞類の使用異なり語数ごとに、使用が見られた接続助詞類を表に表すと、表 2 のようになる。

表 2 母語話者の使用異なり語数別の新出接続助詞類

異なり語数	前段階と比べて、新しく使用がみられた接続助詞類
5	て・連用中止・から・ので・と・ば・たら・なら・し・たり・が
6	ても
7	のに
8	けれど

どの接続助詞類が使用されるかが、まったくランダムに選ばれていれば、データ数が増えるほど異なり語が最も少ない段階ですべての接続助詞類があらわれるはずである。実際「けれど」「のに」「ても」を除いた形式は、最も少ない異なり語 5 語の段階で使用されている。もし、学習者のデータを同様に分析して、最低使用異なり語の進出接続助詞類にあらわれない接続助詞類があれば、それは言語能力からの制限があるものと思われる。学習者の分析をすると、表 3 のようになる。

学習者の最低使用異なり語数は 1 語で、5 語未満が 15 人とデータの半数を占める。

表 3 学習者の各接続助詞類の使用数

学習者	異なり語	て	から	連用中止	ので	し	と	が	ば	のに	たら	ても	けれど	なら	たり	その他
M32	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
M3	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
M31	2	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
M16	2	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
M2	2	4	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
M27	3	3	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
M24	3	6	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
M13	3	5	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
M11	3	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
M6	3	4	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
M29	3	7	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
M28	4	1	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
M21	4	2	1	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
M7	4	0	3	1	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0
M12	4	5	3	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0
M15	5	4	2	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
M8	5	6	1	0	0	0	1	0	1	0	2	0	0	0	0	0
M20	5	3	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
M23	5	2	1	1	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0
M25	5	5	2	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
M17	5	4	1	1	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0
M30	5	1	1	0	0	0	3	0	2	0	0	1	0	0	0	0
M19	5	3	4	0	0	0	3	0	1	0	0	0	1	0	0	1
M14	6	2	2	1	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0
M18	6	2	0	2	0	1	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0
M22	6	4	0	1	0	0	2	0	2	0	1	0	1	0	0	0
M5	6	4	1	1	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	1	0
M26	7	1	0	1	0	0	1	1	0	1	1	0	1	0	0	2
M10	7	0	0	0	0	2	2	1	2	0	0	1	1	0	1	0
M9	7	0	1	1	0	1	1	0	2	0	4	1	0	0	0	0
M1	7	5	0	2	0	1	4	2	2	0	0	0	0	1	0	2
M4	9	1	4	0	0	1	0	2	2	0	1	1	3	1	0	0

作文で使用された接続助詞類の異なり語数ごとに同じ発達段階にあり、その段階の学習者グループで使用された接続助詞類は、その段階において習得されうると考える。前の段階までは使用されていなかった接続助詞類を順に並べると表4のようになる。

表 4 推測される接続助詞類の習得順序

使用接続助詞類の異なり語数	新しく使用された接続助詞類
1~2	て・から
3	連用中止・ので・し・と・ば・が
4	のに・たら
5	ても・けれど・なら
6	たり

最低使用異なり語段階で使用された接続助詞類は 14 種類中 2 種類である。母語話者の 9 種類と比較すると明らかに少ないことから、接続助詞類には習得順序があるものと推測される。

5.3 接続助詞類の間の変異

接続助詞類の変異の例を表 5 に示した。データベースに母語話者による添削例が載っているものは、「て」→「と」のように添削された形式で表し、添削例がのっていないものは「て」→「理由」のように規範的な意味領域で表した。

異なり語 3 語段階までは、「理由」「連用」の意味領域での変異である。一方、異なり語 5~6 語段階では、「条件」「並列」「逆接」の意味領域で変異がみられる。異なり語 5 語段階の、「て」の変異が、どちらも「聞く」に接続する、発見の展開点をあらわす「と」が適切と考えられる例で、決まった文脈でおきるシステム化されたゆらぎである可能性がある。

異なり語 6 語段階以後に「が」が語用論的な機能である「前置き」の意味で使用されている。「前置き」は「逆接」の意味領域ではないので変異として別に扱った。

異なり語 9 語段階で、「と」「ても」の間の変異が、動詞「聞く」に接続する状況でみられる。これは異なり語 5 語段階の「と」「て」間のシステム化した変異と同じコンテキストである。システム化を生むコンテキストで、別の形式との変異もシステム化される可能性がある。

表 5 接続助詞類の変異の例

異なり語数	文章	変異
2	人りーりトル煙を放して、10 万人が考えられます。	て→と
3	つまり人間が気がつかないでたばこはとても危険なものです。	て→理由
3	たばこはこうくを通ってお金をはらうと私たちは直接なばんぐみをテレビにみられます。	と→ので
3	たばこの木をうえる <u>と</u> 葉をとります。	と→て
5	「なぜたばこを吸う？」と聞いて、「しごとでストレス」、「勉強でストレス」と答える人が多いです。	て→と
5	たばこの中には研究者から聞いて、たばこはだいたい二百ぐらい危険な化学製品が入っていた。	て→と
5	そこからこのかみにたばこの悪い影響について書いた <u>ら</u> 十分じゃないかもしれません。	たら→逆接
6	たばこは自分のお金を買って、自分の体の様子が他の人と関係ないと考える人もいた。	て→並列
6	私はこのように考えているが、たばこはだれにも食くないと思います。	が→前置き
7	私はゲームセンターに入ってみたんですが、入りながら、8、9 歳子供達は、テレビゲームを夢中にした。	が→前置き
9	それが聞くと、なぜかタバコを吸い続けるだろうか。	と→逆接

6. 考察

推定される接続助詞類の習得順序と、変異を合わせて、図 2 に表した。網掛けは最初に使用が見られた段階を示す。矢印は変異で、矢印の元にある形式が矢印の先にある意味で使用されたことを示す。二重丸は語用論的な意味をあらわす。

調査対象とした接続助詞類の全意味領域で、何らかの言語形式が使用される異なり語 3 語段階と、調査対象とした接続助詞類の全言語形式が使用される異なり語 6 語段階で、接続助詞類の発達段階を分けて特徴を記述する。

異なり語 3 語段階より前は、少数の接続助詞類の形式とその意味の萌芽的な段階で、「連用」「理由」の意味が、接続助詞類の意味体系を構築する出発点となっている。

異なり語 3 語～6 語段階は、学習者が意味領域の境界線の線引きを試行錯誤していることをあらわす変異が多くみられる。とくに順接である「連用」「理由」「条件」「並列」の意味領域間で変異が多い。「と」～「ので」と「と」～「て」間を除いて、矢印はすべて習得順序が後のものに伸びていて変異の方向が発達と並行していることがわかる。

		使用異なり語数					
言語形式	意味領域	1~2 語段階	3 語段階	4 語段階	5 語段階	6 語段階	7 語以降
て	連用	○	○	○	○	○	○
から	理由	○	○	○	○	○	○
連用中止	連用		○	○	○	○	○
ので	理由		○	○	○	○	○
と	条件		○	○	○	○	○
ば	条件		○	○	○	○	○
が	逆接		○	○	○	○	○
し	並列		○	○	○	○	○
たら	条件			○	○	○	○
のに	逆接			○	○	○	○
なら	条件				○	○	○
ても	逆接				○	○	○
けれど	逆接					○	○
たり	並列					○	○

図 2 接続助詞類の習得順序と意味領域の変化

「と」「て」は二大「変異の生産拠点」である。特に「と」「て」間の双方向の変異は、自由変異である可能性があり、「と」「て」の変異が発達の起動力（the impetus for development, Ellis(1985, p94)）になっている。「と」「て」が関連する変異は、「と」「て」が元となる矢印（「と」「て」の形式で規範的ではない意味を表す）ばかりであることから、学習者は「と」「て」を汎用性の高い形式と受け取っていることが伺われる。

「連用」と「理由」のように異なる意味領域間の線引きをするだけでなく、たとえば「条件」をあらわす「と」「たら」「ば」「なら」のように、同じ意味領域の中で複数の形式が使用されるようになるのもこの時期である。同じ意味領域内の言語形式の習得順序を決める規則性の一つとして考えられるのは、先述した「て」「と」の例のように、意味領域の広いものが先行するという可能性である。例えば、逆接の中で、習得

順序が最初になるのは「が」である。「が」は逆接の形式の中では、表現できる意味領域が最も広い⁽⁴⁾。より限定的な意味をもつ「のに」や「ても」は、変異が示すように、条件の意味領域との線引きという試行錯誤を経て使用が始まる。一方、条件を表す接続助詞類の例から推測されるのは、連語の形式から発達が始まるという規則性である。

「たばことい**え**ば」「考**え**てみ**ろ**と」のような連語での使用が先行している。

異なり語 6 語段階以降は、一通りの言語形式と意味の対応関係が構築された後である。そこでは「が」が「前置き」の意味で使用されるように、語用論的な機能での使用が始まるのではないかと考える。「し」は今回のデータでは、異なり語 6 語段階以前ではすべて、「～し」とひとつの例をあげるものだったが、異なり語 7 語段階以降ではすべて「～し～し」と二つの例をあげていた。接続助詞類を含む連用修飾節が何度も繰り返されると、それぞれの連用修飾節と主節との距離が広がる。すると修飾節の独立性が高くなり、文法的役割が弱まり、聞き手の類推をたよることになり、談話的役割が相対的に強まる。今回は調査対象としていないが、主節をとまなわないで文末で使用される接続助詞類は、異なり語 6 語段階以降にみられると予想される。

7. 今後の課題

文末の接続助詞類や接続詞を含めるとどうなるか、かたまりで使用される表現がどのような役割をもつか、などについて、数量的な分析の精度を上げて分析を深めたい。また、縦断データで同様な結果が得られるか調査する必要がある。

注

- (1) Variability の訳語は変異、可変性、揺らぎ、などある。本稿では変異を採用する。
- (2) 「また、たばこのコマーシャルは子どもに悪い**え**いきょうを与える**から**、テレビで放送できないようにするべきだ。」という同じ記述が 4 名の作文に見られた。これは何らかの提示があった文である可能性があるので、調査対象としない。
- (3) 森田(1988)では「**て**」に先行する部分が、後に述べる事柄の成り立つ場面や状態を説明する(p414)」として、並列、対比、同時進行、順序、手段・方法、結果、原因・理由、逆接、としている。
- (4) 二つの事柄を並べあげる際のつなぎの役目をする（共存または時間的推移）2) 題目・場面などを持ち出し、その題目についての、またはその場合における事柄の叙述に接続する（前置き）3) 補充的説明の添加 4) 内容の衝突する事柄を対比的に結びつけ前半に拘束されずに後件が存在することを表す。（既定の逆接条件）

参考文献

- (1) 池尾スミ (1963) 「「～て」 (-te form) について－いわゆる理由を表す接続形－」『日本語教育』 3, p39-54
- (2) 市川保子 (1993) 「中級レベル学習者の誤用とその分析－複文構造習得過程を中心に－」『日本語教育』, 81, p55-66, 日本語教育学会
- (3) 加藤英司(1984) 「接続詞・接続助詞の使用頻度と日本語能力との関係」, 『日本語教育』, 53, pp139-149, 日本語教育学会
- (4) 国立国語研究所(1951) 『現代語の助詞・助動詞-用法と実例』 秀英出版
- (5) 国立国語研究所(2002) 『日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース ver.2』
- (6) 張麟声 (1998) 「原因・理由を表す「して」の使用実態について－「ので」との比較を通して－」『日本語教育』 96, p121-131
- (7) 栃木由香(1989) 「日本語学習者のストーリーテリングに関する一分析 話の展開と接続形式を中心に」『日本語教育論集』第 5 号筑波大学留学生教育センターpp59-174
- (8) 富田隆行 (1993) 「原因・理由を表す「て」について 日本語教育の立場から」『東京大学留学生センター紀要』 3, p49-58
- (9) 永野賢 (1951) 「「から」と「ので」はどう違うか」『国語と国文学』 29-1
- (10) 西由美子(1997) 「新聞社説における接続表現の日英対照研究」平成 9 年度お茶の水女子大学人文科学研究科日本言語文化専攻修士論文
- (11) 廣利正代(1993) 「初級日本語学習者の接続詞・複文構造に関する縦断的習得研究」平成 5 年度お茶の水女子大学人文科学研究科日本言語文化専攻修士論文
- (12) 望月通子 (1990) 「条件づけをめぐって－「理由」の「シテ」と「カラ」－」『日本学報』 9, p33-49
- (13) 森田良行(1988) 『日本語の類意表現』 創拓社
- (14) 吉田妙子 (1994) 「台湾人学習者における「て」形接続の誤用例分析－「原因・理由」の用法の誤用を焦点として－」『日本語教育』, 84, p92-103, 日本語教育学会
- (15) 渡辺実 (1971) 『国語構文論』 塙書房
- (16) Ellis, R. (1985) *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford University Press
- (17) Ellis, R. (1987) *Second Language Acquisition in Context*, Prentice Hall international

(お茶の水女子大学大学院)

The development of conjunctive particles and 'te' composing subordinate clause of learners of Japanese

KIYAMA Mika

This paper deals with the interlanguage variability of Japanese 'setsuzokujoshi-rui' (conjunctive particles 'kara', 'node', 'to', 'tara', 'ba', 'nara', 'ga', 'noni', 'temo', 'keredo', 'shi', 'tari', and 'te' composing subordinate clause) for the purpose of clarifying the process of form-meaning mapping development by learners of Japanese ('learners').

Setsuzokujoshi-rui were chosen from 32 essays of learners (Malaysian) and 33 essays of Japanese university students, selected from multilingual corpus distributed by the NIJLA (National Institute for Japanese Language) to. The title of essays are the same, 'My opinion regarding smoking'.

Acquisition sequence of 'setsuzokujoshi-rui' was estimated by the following procedures: First, to line learners and to divide them into several groups by the number of types of 'setsuzokujoshi-rui' in each essays. Secondly, make a group of used 'setsuzokujoshi-rui' in each stage.

Variabilities are also investigated to find which 'setsuzokujoshi-rui' have close relation in the process of development.

Consequently, 1) 'te' or 'kara' were found to be the first in acquisition sequence, 2) variabilities are found most in 'te' and 'to', 3) 'ga' usage in pragmatic functions observed after in grammatical functions.

(Graduate School, Ochanomizu University)